

人間が行っていたことを機械が行うようになる。これはいまではあまりにも当たり前の話で、疑うことなくだれもが許容しているわけですね。その先端をいくのがコンピューターだといってもいいかもしれません。ただ、私はいま疑いもなく許容されているところの人間から機械へというプロセスにちょっと疑いをさしはさみたいのです。むしろ機械化されることからなにか人間が守るべきものはないだろうか、あるいは甦らせていくものはないだろうかということを、私の音楽を通して考えたいと思っています。ということは人間から機械へというプロセスとは逆の考え方になります。私は音楽の中心というのはやはり人間の演奏にあると思います。人間が演奏するというその行為がやはり音楽の最も大事なことだと思ふんですね。これから聴きたいだけの『ピアノ・メディア』という曲で、これはピアノの独奏曲なんですけれども、技術的には非常に難しい曲です。その難しさは従来の見方からしますと、機械的あるいは無機的といえるかもしれません。ただ、単に機械的な内容とか正確さを求めるのなら、私はそれをピアノの曲にしないで、例えばピアノの音を模したコンピューターにでも演奏させたほうがずっと鮮やかな結果が出たと思うのですが、それをコンピューターでやらせないでピアノを使ったというところにこの作品の考え方があられるわけです。それは言い換えますと、人間の手作業が機械に取って代わられようとするのを、人間の手で守り抜くという意思に支えられているといってもいいかと思えます。さらには機械で行い得るものも人間の行為に還元して、人間の手に取り戻す。機械化あるいは電子技術化の洗礼を受けた後の手や肉体の復権、それが人間と楽器との間に新しい関係をつくりだすのではないかと考えて作曲したのが、この『ピアノ・メディア』というピアノの独奏曲です。ですからこの曲は従来のピアノ曲とはかなり異質であり、たいへん固有の技術を要求されるわけです。では、その『ピアノ・メディア』の最初のほうをお聴きいただきたいと思えます。